

高社研地理部会主催 地理夏季巡検 報告集



トルコ大使館にて撮影。前列中央がトルコ大使館二等書記官のムスタファ・ジウムフル・オズカン様、左が秘書の穂山昌弘様、右が地理部会長の狩野徹。建物は広島平和公園や東京都庁などで知られる建築家・丹下健三（1913～2005）の設計による。

埼玉県高等学校社会科教育研究会地理部会

この巡検は、一般社団法人日本地図センターの研究活動支援を受けて実施したものです。ここに深く感謝申し上げます。

■ 目次

● 高社研会長あいさつ		3
● 地理部会長あいさつ		4
● 巡検の概要		5～6
● 見学内容と参加者の声		7～18
● 巡検を終えて・参加者が考える多文化共生社会		19～21
● 来年に向けて・参加者の声から		22



(GIS ソフト「MANDARA」により作成)

事前学習課題などの本巡検に関する情報は、<https://seifu.sakura.ne.jp/chiribukai/> に掲載してあります。



■ 高社研会長あいさつ

埼玉県高等学校社会科教育研究会長
(埼玉県立いずみ高等学校長)
栗藤 義明

高社研の先生方におかれましては、日頃から本県の地理歴史科・公民科教育に係る研究・開発、授業実践等に積極的にお取り組みいただいておりますことに深く敬意を表します。また各研究部会において、よりよい授業づくりのための様々なご尽力に感謝申し上げます。

巡検という術語は地理学徒には馴染み深いものです。巡検は **Excursion** (エクスカーション) とも云いますが、昔手にした地理学用語辞典に拠れば、「地理学をはじめとする野外科学において、学問的に興味深い地点に専門家や学生その他の人々を案内し、現地をよく知る研究者等が説明を行うことをいう。」と定義されています。某国営放送の「ブラタモリ」は、自称坂道愛好家の森田一義氏が参加するエクスカーションを番組化した、知的エンターテインメントとでも云うべき優れたプログラムだと思います。巡検・エクスカーション・現地研究・フィールドワークといった地理学の術語が、この番組のおかげで、多くの市民に浸透したのではないかと思います。

少々余談が過ぎましたが、今回の地理部会の巡検では、「多文化共生社会の実現に向けて」をテーマに、国際理解教育にフォーカスして企画されました。巡検当日(7月31日)の都内は、最高気温が35度近いという大変な酷暑となりましたが、東京ジャーミイ(日本最大のイスラーム寺院)、新大久保の多国籍街、トルコ大使館、江戸川印度文化センターと、実にバラエティに富んだフィールドを設定し、地理学の学びを十二分に堪能することができたと思います。多くの地歴・公民科の先生方と好奇心旺盛な生徒たちが参加してくださり、大変充実した巡検になりました。この巡検を企画の段階から準備された地理部会の担当の先生方には最大限の謝意を贈りたいと思います。

いよいよ令和4年度から新しい学習指導要領がスタートします。地理歴史科では必修科目として「地理総合」が新設されますが、これは「**Society5.0**」時代を睨んで、約50年ぶりに地理が必修化されるという大きな変化を意味しています。地理総合の目標は「社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を育成することを目指す」とありますが、その目標に向けて、地図と地理情報システム(GIS)の活用、国際理解と国際協力、防災と持続可能社会の構築、といった三つの柱に軸に地理の学びが再構成されようとしています。地理学が本来的に有する学際的な視点、グローバルな地理情報の把握(認知)する力とその空間情報を考察する力、これらは複雑化する社会を読み解いていく手掛かりになると思います。地理学の学びの裾野を広げるうえで、今回のような巡検は、地理学の楽しさや奥行きを深さを理解する絶好の機会になるのではないかと思います。

かつてないスピードで社会が変化し、グローバルの波が押し寄せてくるこの国において、私たちが担う国際理解教育や多文化理解教育の進展を越えるかたちで、外国人との共生が現実のものとなってきています。今回の巡検が、こうした日本社会の変容を考察するうえで、大いなる示唆を与え会員の先生方の授業に生かされていくことを切に祈ります。この報告集をお読みいただき、巡検の面白さをもっともっと知っていただいて、先生方の学校での地理の授業や、学びの旅としての修学旅行などに是非生かしていただければ幸いです。

■ 地理部会長あいさつ

埼玉県高等学校社会科教育研究会地理部会長

(埼玉県立浦和高等学校定時制課程教諭)

狩野 徹

私ども埼玉県高等学校社会科教育研究会では例年、教員対象の臨地調査研究（巡検）を実施しており、年間3回の研究会では、授業研究や研究発表に加え研究会場周辺の巡検や、地域やテーマを定めた巡検を実施しています。

この蓄積の上に、広くその経験や情報を生徒諸君や地理歴史、公民科の教員の皆様へ還元し、更に教員の研修、生徒諸君の学習を深めるため、県内各校の生徒諸君の参加を得てこの巡検が実施することが出来ました。

現在、地理部会の先生方の大きな課題として、学習指導要領における「地理」科目の必修化があり、「国際理解教育」「GIS教育」「防災教育」について意識が高まっている所でもあります。

その流れの中で、坂戸西高校の加藤一郎地理部会副部会長を中心として、教員対象の研修を生徒諸君へ公開するというアイデアが提案されました。この提案は数次の専門委員会で慎重に審議され、研究会総会での承認を得、十分な準備の下、去る7月31日に実施されました。

この巡検は、3つのテーマの内の「国際理解」分野、更に「多文化共生」にフォーカスし見学先を設定しました。県内各地から生徒諸君が集まって見学できる地域として、東京都内を目的地域として定め、1日の日程で見学可能な4か所3施設を、地下鉄移動により訪問するというコースとしました。

まず、渋谷区の代々木上原駅近くのイスラム教のモスク「東京ジャーミイ」様で日本とイスラム教徒の関わりの歴史を学び、礼拝所やハラルフードの売店へお邪魔しました。中東地域のイスラム教文化に基づく建築や食文化を知り、東京都内でも遠い中東の生活に触れられることに参加者一同、発見や感動を得ることが出来ました。

昼食は、現在最も東京の多文化共生の姿を現している新宿区大久保通り沿いの各国料理を提供するレストラン等で各自取ることとしました。日本の多文化共生をまさに舌で味わい、レストランや雑貨店などに多くの各国出身の若者たちが集まる様子や、通りの店みせの看板から東京に滞在、在住する海外出身者の生活の一端を垣間見ることが出来ました。

午後は原宿の繁華街に近いトルコ共和国大使館へお邪魔し、イスラム圏の有力国の一つであるトルコ共和国について日本との関わりや観光等の説明、紹介を受けました。19世紀後半以降アジアの東端西端の国としてほぼ同時に近代化を進めた両国の絆と、それぞれの近隣の国々との歴史的関係に思いをはせるひと時となりました。

最後の見学地は、地下鉄を乗り継ぎ、江戸川区葛西の「インド文化センター」様で近年増加したインド出身の方々の社会についてお話を伺いました。インド出身者の方々はIT関連の業務に携わる方が多く、勤務先の都心に近い江戸川区に多く住んでいるそうで、説明されたプラニク＝ヨゲンドラ氏は国内大企業勤務を経て帰化、多文化共生活動の中、区議会議員にまでなられたとのことでした。

真夏の猛暑日、私たちは予定通り、以上4か所の見学を行い、夕方早く現地にて解散、それぞれ帰路に就きました。この巡検ではあらかじめ、生徒諸君に予習課題を配布し事前学習の上、本庄、秩父はじめ全県から参加者を得て、すべての参加者がそれぞれ見学地での体験や学習により、新たな知見や気付きを持って今後の地理科学学習に個々臨むことができると企画運営者一同自負しております。

最後に、この巡検実施をお認め頂いた栗藤会長はじめ生徒の参加、教員の勤務についてご配慮いただいた各校の校長先生方、教育局の担当の先生方、課題作成の各校先生方、補助を頂いた日本地図センター、見学先の皆様ほか関わられたすべての方々に、部会長として厚く御礼申し上げます。

巡検の概要

1 高社研地理部会主催「地理夏季巡検」立案の経緯

地理部会では各学期の研究会を実施しているが、そのうち、2学期実施の臨地調査研究、いわゆる巡検が好評であり、部会の先生方が継続して企画・運営している。近年では地理部会のみならず、歴史、社会部会の先生方の参加も増え、研究会運営からみても参加者の満足度や研修成果も高まっているといえる。一方、近年のICTの発達、活用推進によって教育の情報化が進み、知識やイメージとしての学習内容の伝達は充実しつつあるが、現実に触れる教科学習活動が行われる機会は減少していると考えられ、さらには教員の世代交代が進み、地理部会の先生方の持つノウハウの継承も必要となり、2022年度実施の新教育課程で掲げられている「地図・GIS」、「国際理解」、「防災」という「地理総合」の三本柱や、深い学びを進めるために何らかの手立てを講じるときと判断し、立案に至ったものである。

2 テーマ

「多文化共生社会の実現に向けて」をテーマに設定し、見学地を選定した。その理由として、「地理総合」の三本柱のうち、これまで国際理解をテーマにした巡検が希薄だったことがある。加えて、今年4月から新しい在留資格である「特定技能」による外国人労働者の受け入れが始まったことから、国際理解に関連するテーマでの巡検を企画した。

3 当日の日程 * () 内の時刻は予定時刻

移動はすべて東京メトロを利用した。切符は割安な「東京メトロ学生用24時間券」(300円)を東武トップツアーズを通じて購入した。ただし、この切符は、エージェンシーを通さないと購入できないことに注意する必要がある。

9:30	小田急線・東京メトロ千代田線 代々木上原駅改札口集合
10:00～11:50 (10:00～11:30)	東京ジャーミイ 代々木上原++(千代田線)++明治神宮++(副都心線)++東新宿
12:15～13:30 (12:00～13:20)	新大久保の多国籍街(昼食は自由食) 東新宿++(副都心線)++北参道
14:00～15:10 (14:00～15:00)	トルコ大使館 明治神宮++(千代田線)++大手町++(東西線)++葛西
16:30～18:30 (16:00～17:45)	江戸川印度文化センター
18:30 (17:30)	東京メトロ東西線 葛西駅解散

解散時刻が大幅に遅れたことは、来年度の大きな課題。

4 参加者

前日に欠席連絡があり，最終的な参加者は 40 名であった。内訳（属性）は次表に示す。

参加者の身分		教員の年齢構成		教員の所属部会	
教員	26	20代	4	地理	17
生徒	14	30代	6	歴史	4
計	40	40代	3	社会	5
		50代	7	計	26
		60代	6		
		計	26		

5 事前学習課題

五つのセクションにわけて地理部会専門委員が分担して作成した。作成にあたっては，実際の授業の展開を意識したつくりを心がけた。これは，「多文化共生社会の実現」というテーマ（単元）で授業を行う場合の展開例を示しており，巡検は単元のまとめである。

- 1 東京 23 区における外国人の居住分布（本庄定・栗原健）
（問い）外国人の居住地は国籍によって違いがみられるのだろうか？
- 2 渋谷区と江戸川区の地形・WebGIS の活用（浦和・澤岡知広）
（問い）見学地はどのような地形の上に立地しているのだろうか？
- 3 トルコとインドの地誌について（川越・森山裕太）
（問い）トルコとインドの自然環境・経済・社会の特徴は何だろうか？
- 4 歴史ある新宿区大久保（浦和定・狩野徹）
（問い）日本有数の多国籍街・新大久保の「昔」はどうだったのだろうか？
- 5 江戸川区議・よぎさんの考え（坂戸西・加藤一郎）
（問い）多文化共生社会の実現には何が必要だろうか？

6 実施までの流れ

2018 年 10 月	地理部会第 2 回専門委員会で巡検実施を問題提起
2019 年 1 月	地理部会第 3 回専門委員会で巡検実施了承
2019 年 2 月	高社研第 2 回理事会で巡検実施了承
2019 年 5 月	県指導課より巡検実施了承 （一財）日本地図センター研究活動支援に応募 高社研総会で参加者への事前告知
2019 年 6 月	地理部会専門委員へ事前学習課題の作成依頼 全県へ文書による告知（6 月 3 日） 「地理夏季巡検のお知らせ」（以下，「お知らせ」）第 1 報配信（6 月 28 日） 事前学習課題配信開始（6 月 28 日）
2019 年 7 月	（一財）日本地図センターより研究活動支援の採択通知 地理部会専門委員による事前調査 質問事項とりまとめ・事前送付 「お知らせ」第 2 報～最終報（第 4 報）配信 巡検実施（7 月 31 日）

■ 見学内容と参加者の声

1 東京ジャーミイ…異文化を体験しよう!



(地理院地図・土地条件図により作成)

東京ジャーミイは代々木上原駅の小田急線の高架下を東西に通る道路（井の頭通り）沿いにある。代々木上原駅から井の頭通りに出ると、東京ジャーミイは登り坂を上がったところにある。すなわち、台地上に立地する。逆に代々木上原駅は谷底にある。上の土地条件図の「盛土地」は、ほぼ台地に刻まれた谷である。代々木上原駅北側の谷は渋谷駅まで続き、谷底を宇田川が流れるが、現在は暗渠（あんきょ）になっていて川の流れを見ることはできない。* 1947年のキャサリン台風では床上まで浸水したが、1964年の東京オリンピックのころ巨大な下水管が埋設されて暗渠になり、浸水の恐怖から解放されたという。また、代々木八幡駅付近で宇田川と合流する河骨（こうほね）川は、有名な童謡「春の小川」のモデルとして知られる。現在、暗渠の上は遊歩道になっており、代々木八幡駅よりも南側の遊歩道沿いにはおしゃれなカフェや雑貨店が点在する。また、NHK放送センターの西側にはNHKの関連会社が密集し、なかには手作りの着ぐるみを制作する会社もある。

(参考文献)

* 辻野京子 (2003) : 『まちの記憶 代々木上原駅周辺』, 個人書店銀座店。

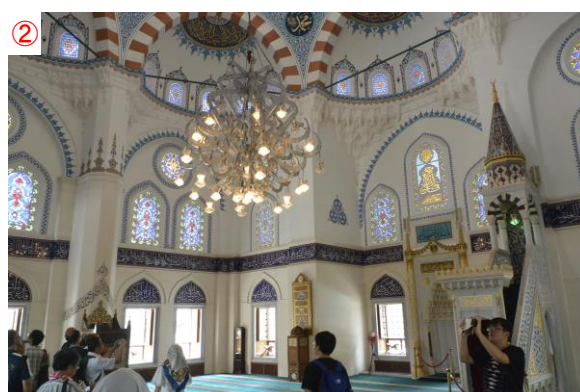
参考文献は、代々木八幡駅近くの宇田川の谷沿いの商店街で、長年、青果店やスーパーマーケットを営まれてきた宇佐見ヨシ子様にお借りしました。突然の訪問にもかかわらず、たいへん親切にいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

東京ジャーミイでは、日本人ムスリムである下山茂氏にご案内いただいた。まず1階の広間にて設立当時の写真を見ながら、東京ジャーミイの歴史について学んだ。そもそも代々木上原にモスクができた経緯は、1917年のロシア革命にさかのぼる。ロシアで迫害を受けたムスリムは、シベリア鉄道で中国・満州へ移動し、その一部は日本にも移り住んだ。彼らは東京では渋谷区富ヶ谷を中心に集まっていたが、やがてモスク設立の動きがうまれ、1938年に東京回教礼拝堂として完成した。この背景には、日中戦争やその後のアメリカ・イギリスとの戦争のためにムスリムを懐柔しようとする軍部・政府の協力があった。当時の写真からも、落成式に軍部の有力者たちが参列していたことが確認できる。

その後は老朽化のため1986年に取り壊されたが、トルコからの巨額の寄付によって2000年に再建された。内外装に用いる建材の大部分はトルコから持ち込まれ、多くのトルコ人建築家や職人が携わった。広間では窓や家具、装飾など美しいトルコ様式の内装を鑑賞した。いったん外に出て、トルコが原産であるチューリップの装飾など、外装についてもご紹介いただいた。それから1階のトルコ文化センターをまわった後、2階の礼拝場を見学した。幾何学模様やステンドグラスによって細部にまで彩られた礼拝場、特に天井の美しさは圧巻である。

東京ジャーミイについてだけでなく、ラマダーンや礼拝、外壁に人工の鳥の巣が置かれる意義など、イスラーム教についても数多く学んだ。人工の鳥の巣が置かれるのは、神の創造物である渡り鳥が羽を休める場を提供するためだという。私たちはメディアの報道などからイスラーム教に対して危険なイメージをもってしまうこともあるが、今回の見学でイスラーム教が人々に与える温かみや安らぎを感じることができた。下山氏の語っていた「モスクは心の避難所」という言葉が強く印象に残っている。

(埼玉県立本庄高等学校定時制教諭 栗原健)



①は食堂（多目的に利用可）で下山氏の説明を熱心に聞く参加者。当日は日本の大学に通うパキスタン出身の方が勉強していた。②は礼拝場。絨毯には横線が入っているが、礼拝は社会的地位等に関係なく横に並んで行う。神の前の平等の考え方に基づく。③はミナレット（尖塔・せんとう）と鳥の巣箱（中央やや左下）。人間以外の動植物も神によってつくられたというイスラームの考え方に基づき、モスクには鳥にも休息の場が設けられている。

- 下山茂さんのイスラーム教の五行が何も特別でないというお話が印象に残りました。日本人であり、イスラーム教を信仰している立場ならではのお話でした。(上尾鷹の台・武士田透・地理)
- イスラームについてはもっと学ぶ必要性を感じました。(川口東・大田史郎・社会)
- 東京ジャーミイに行くまで、日本にあんなに立派なモスクがあるとは思いませんでした。(熊谷西・小澤美羽・生徒)
- 東京ジャーミイは、ずっと興味がありながらも訪れることができずにいたので、今回の巡検で訪れることができて良かったです。下山さんの解説もあり、かなり詳しく理解することができました。初代東京ジャーミイを建てたのが、ロシア革命から逃げてきたタタール系ロシア人だったことが、大変興味深かったです。新大久保では、以前から気になっていた駅近くの脇道にできたイスラーム横丁を確認することができました。以前、インターネットでイスラーム横町の存在を知り、興味を持っていました。バングラデシュやパキスタンの出身らしき人々が経営する食料品店が3店舗ほどありました。(川越工業定・新井晋太郎・歴史)
- 日本のイスラームはトルコ系ロシア人の難民を受け入れたことがルーツであることを初めて知りました。(狭山緑陽・古川克・地理)
- 教科書でイスラーム教について勉強した時よりも、現地を訪ねて肌で雰囲気を感じながらお話を聞いた今回の方がより深く理解できた気がしました。(熊谷西・岩崎彩織・生徒)
- 礼拝の際に横一列に並ぶことや断食の際に食卓を囲むことなど、「イスラーム圏における平等の考え方」を強く感じました。また、下山様の「礼拝は心の食事である」という言葉がとても印象に残っています。多くの日本人からすれば、なぜ1日5回も礼拝をするのかと疑問を持って当然だと思いますが、私はこの言葉で礼拝の意味が腑に落ちた気がしました。(川越・森山裕太・地理)
- ロシア革命の影響などもあって、当時の日本政府が国策としてムスリムを積極的に受け入れ、支援していたこと。とくに東京ジャーミイの前身(東京回教寺院)の設立に、右翼や軍などの有力者が関わっていたこと。意外でした。イスラーム教の五行、「礼拝」と「断食」の意味に感銘を受けたこと。下山さんのお話の中で、前者が「心の栄養」、後者が(食べられることへの)「感謝」や(食べられないことへの)「我慢」、(貧者への)「共感」を教えていただきました。目から鱗でした。(飯能南・松本茂幸・地理)
- モスクは礼拝だけでなく食事や相談の場であることを知りました。また、人工の鳥の巣まで備えられており、人間だけでなく渡り鳥も羽を休めるようなシェルターになっていることに驚かされました。これは東京ジャーミイでお話を聞くまで知らなかったことなのでとても印象的でした。(南稜・嶋優衣・生徒)
- 日本が大正、昭和時代においてイスラームに対して厳しく当たることなく、むしろ味方になるように当たっていたことです。1925年に制定された治安維持法によって、宗教活動がだんだんと難しくなっていったと思っていたのでとくに印象に残りました。(熊谷・大澤憲悟・生徒)
- 東京ジャーミイが代々木上原の地に建設されたきっかけについて。ロシア革命があったからこそ東京にモスクができたということ。歴史の面白さが凝縮されているように感じられた。(浦和・澤岡知広・地理)

- 東京ジャーミイの設立が、ロシア革命の難民受け入れと関係していたこと。また 1933 年当時の日本の政府・軍部が、日中戦争を有利に進めるために中国のイスラーム教徒を利用した側面もあったことなど、奥深い歴史の真相がわかった。下山さんの話は、イスラームの文化についていろいろと奥深いものを感じました。例えば、家畜のための水飲み場や鳥の巣など、キリスト教の博愛とは一線を画す、むしろ仏教の「慈悲」に近い、アジア的なものを感じました。(浦和商業・岡村豊・社会)
- 以前から映像等で拝見していたモスクの美しさが想像以上ですばらしかった。東京ジャーミイの建設のきっかけや、日本の大東亜共栄圏の構想との関連など、大変興味深いものだった。テロのイメージについての話も伺いたかった。世界史で学習する内容と、東京ジャーミイ建設のきっかけがつながり感動しました。点と点が繋がった感じでした。(小川・花輪恵・歴史)
- 東京ジャーミイを通したイスラームについての説明が最も印象に残っている。背景にロシア革命があって、その建設には軍も大きく関わっていたことに驚きを感じたが、一番印象的であったのは礼拝の間における男女の区別や六角形を意識した建物づくり等に見られるイスラームの合理的な側面を強く感じたことである。(南稜・貴志弘基・地理)

2 トルコ大使館・自国文化の広報活動を担う政府機関の役割を知ろう！



(地理院地図・土地条件図により作成)

トルコ大使館は明治通り沿いの台地上に立地している。大使館の東側は深い谷（「盛土地」になっているところ）が刻まれており、これが渋谷川の谷である。渋谷川はこの図の範囲では暗渠になっており、この地図の範囲外になるが、JR 渋谷駅の南側で川が顔を出す。暗渠の上は宇田川と同様に遊歩道になっており、遊歩道に沿っておしゃれなブティックやカフェが軒を連ねる。いわゆる「裏原宿」（通称「うらはら」）は、明治通りと表参道が交差する北東側のエリアである。竹下通りはJR 原宿駅から東南東に伸びる明治通りまでの小道で、通りの両側にはファッション関係やクレープやタピオカなどを販売する店舗が密集する。このように原宿が日本を代表するファッションタウンであることに関連して、明治通り沿いにはアパレル関連の本社やオフィスが立ち並ぶ。

トルコ大使館には、事務棟と大使館棟があり、我々は大使館棟に案内された。大使館棟の中にあるサロンは、レセプションやパーティで主に使われているようだ。

棟内に入ると、入口のところに船の模型が展示されており（写真①）、穂山昌弘氏からご説明いただいた。この船は1890年に和歌山県沖で台風に巻き込まれ、遭難した「エルトゥール号」であり、その際にトルコの乗組員587名が犠牲となった。しかし、日本人が必死に救助し、69名を救助した。この献身的な救助活動が、今なお日本とトルコが根強い友好関係にあることの背景となっている。

次に、階段を上がったところにあるサロンに案内していただき、トルコの概要について、スライドを交えつつ穂山昌弘氏からご説明いただいた（写真②）。トルコは、アジアとヨーロッパを結ぶ交通の結節点となっており、古くから栄えてきた。特に、海外からの観光客数は約4,000万人、世界第6位（2015年）であり、国としても力を入れている産業の一つである。日本人は、イスタンブールやカッパドキアなど遺跡や風光明媚な景観がみられる場所を訪れることが多い。一方、ヨーロッパから来る人の多くは地中海沿岸のリゾート地やビーチを訪れるようだ。その後、トルコの観光地であるイスタンブール、カッパドキア、アンタルヤについて、各地の観光名所を紹介したイメージ動画を視聴した。イスタンブールは歴史ある街並みと建築物が印象的であった。カッパドキアは侵食によってできた奇岩と、かつてあった地下都市、熱気球の様子が印象的であった。アンタルヤはリゾート拠点となっていて、地中海の美しい海が印象的であった。アンタルヤは今の外務大臣（メヴリュト・チャヴシュオール氏）の出身地であると伺った。

動画視聴後、トルコの概要についてご紹介いただいた。首都のアンカラはトルコにおける政治の中心地となっており、標高800mほどのところにある。トルコ共和国の公用語であるトルコ語はアラビア語が基となっており、現在ではギリシャ、アルメニアなどでも話されている。トルコ語はムスタファ・ケマル・アタチュルクによる文字改革が行われ、現代のアルファベットに似た形が作られた。トルコ語文字の特徴としては、「Q」や「W」といった文字がないことや、「Ç」や「Ğ」などアルファベットの上下に独特の記号がつくような文字が存在する。

続いて、トルコの食文化についてご紹介いただいた。トルコ料理は世界三大料理（諸説あり）の一つであり、さまざまな国の文化が入り混じった食文化が特徴的である。料理は野菜中心で、オリーブオイルを多く使う傾向にある。朝食の一例としては、チャイ、ジャム、白チーズ、パンなどが挙げられる。また、Turkish teaの特徴としては、非常に濃く煮だした原液をお湯で割って飲むスタイルらしい。日本人にもなじみ深いケバブは、焼いて調理する料理の総称であり、串焼きのシシケバブや回しながら焼くドネルケバブ、ピリ辛のウルファケバブなど実にさまざまな種類がある。（次ページに続く）



最後に質疑応答の時間が設けられ、巡検参加者から二等書記官のムスタファ・ジウムフル・オズカン氏へ直接質問した。その際のおもな質問と回答の概要は以下の通りである。

(埼玉県立川越高等学校教諭 森山裕太)

- トルコ語独自のアルファベットはどのように読むのか。

「Ç」はチュ、「C」はジュと読む。「Ğ」はやわらかい G でほとんど発音しない。「Ş」はシュと読む。

右の写真は、この質問をしている高校生。



- 午前中に見学した東京ジャーミイで見た幾何学模様にはどのような意味があるのか。

八つの頂点のある星が描かれていれば、アラブ文化における天国への入口を示す意味がある。

- 本庄市がトルコのホストタウンになっているが、具体的にどんなことをしているのか。

パラリンピック・視覚障がい者サッカーのキャンプ地として利用される予定である。

- トルコは親日国として有名だが、どのような点で日本に親しみを感じているのか。

日本人は洗練されていて、勤勉で、信用できるイメージがある。また、日本製品の品質が良いイメージがある。また、トルコに来る日本人旅行者の印象も良い。

- (日本は少子高齢化などの問題を抱えているが) トルコにおける最大の問題は何か。

トルコは地政学的に不安定な地域であり、トルコ周辺の東西南北では各地で紛争が頻発している。また、優秀な頭脳をもった人材が国外に流出してしまっている現状もある。

- トルコが各地から難民を受け入れていることの背景は？(もしかしたらヨーロッパ諸国に人が流れていくからあまり影響がないと考えているのか)

トルコは国連人権条約に批准している。このことは難民を受け入れるという覚悟があるということである。また、国際社会における義務であると感じている。そのため、戦争や暴力から逃れてきた人を拒絶したことはない。目の前で命の危険が迫っている人がいて、受け入れないと考えた人がいなかったということだと思う。

- 日本や他国には決して無いような大変深い歴史のある世界遺産が数多くトルコには残されていたことを知り、自らの目で見に行ってみたいと思いました。自分の興味のある「言語」についても非常にわかりやすく教えてくださったのでとても感謝しています。(南稜・岩崎比呂・生徒)
- トルコ大使のお話のなかで、第二次大戦で生じたヨーロッパの労働力不足をトルコ人労働者が支えてきたという自負に、思わず肯いてしまいました。(浦和商业・岡村豊・社会)
- トルコ大使館など普段個人では入ることの難しい施設や聞くことのできない話を肌で感じる事ができたのはやはり貴重な体験であり、大きな財産となったと思う。(南稜・貴志弘基・地理)
- トルコ政府の外交姿勢と難民受け入れについてのお話がとくに印象に残りました。トルコは黒海を挟んでクリミア半島、ボスポラス海峡を挟んでバルカン半島、東はカフカス諸国、南はシリア・イラクと政治的に不安定な紛争地域に囲まれており、慎重かつ戦略的な外交によって自国の安定を図っていること、加えてシリアと国境を接しており、目の前にいる難民を積極的に受け入れてきたことを知ることができたことは大きな収穫になりました。(坂戸西・加藤一郎・地理)

「今昔マップ on the web」の紹介

次ページの江戸川印度文化センター周辺の地形図は、「今昔マップ on the web」を利用しています。わが国では、明治期に欧米の近代科学技術を積極的に受容してきましたが、地図も例外ではありませんでした。はじめフランスの、のちにドイツの地図製作技術を学び、精密な地図がつくられるようになりました。これらの地図は、地域の変化を知る上で非常に重要な史料としてさかんに利用されてきました。

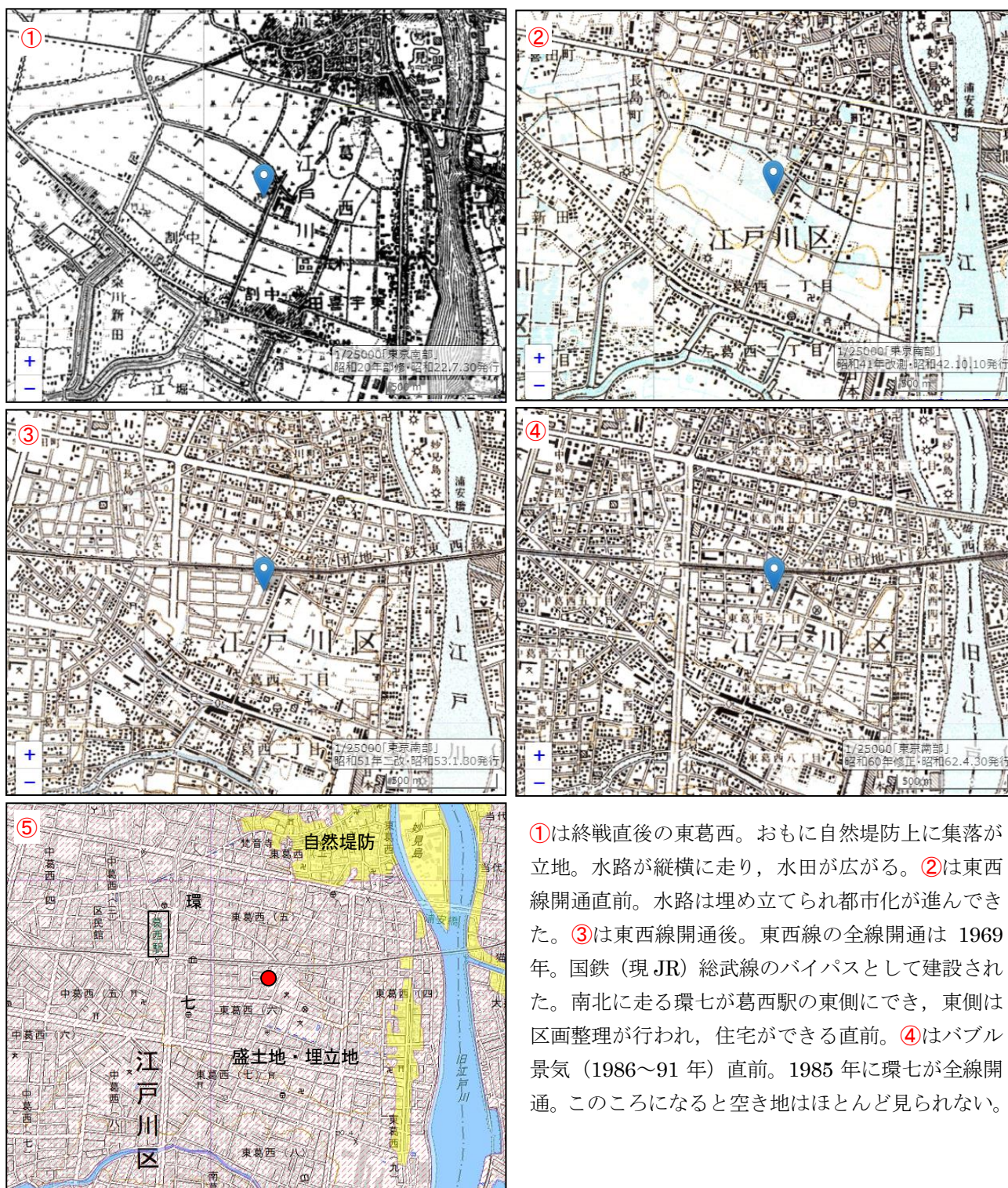
しかし、近年まで過去に作成された地図(旧版地形図)を利用するためには、原則としてつくば市の国土地理院や、東京・九段下の関東地方測量部に出かける必要がありましたが、埼玉大学教育学部の谷謙二先生により、「今昔マップ」という旧版地形図をパソコン上で閲覧するソフトが開発され、現在ではインターネット上で公開されています。これが「今昔マップ on the web」です。まずは使ってみましょう!

ただし、一つ注意しなければいけないことがあります。それは、「地形図記号はずっと同じではない」ということです。地形図記号は「今昔マップ on the web」の画面左にある「凡例表示」ボタンをクリックして確認して下さい。また、スマホでも利用可能です。外出先で「昔、この地域はどんな様子だったのか」と思うことはありませんか? そんなときは、画面左の「現在地表示」・「現在地中心」・「軌跡」をONにして下さい。現在地が表示され、昔の様子を簡単に知ることができます。

「今昔マップ on the web」 <http://ktgis.net/kjmapw/>



3 江戸川印度文化センター…外国人の日本における生活実態は？



（今昔マップ on the web・地理院地図により作成）

江戸川印度文化センターは、東京メトロ東西線葛西駅の東側の埋立地に位置する。いわゆる「ゼロメートル」地帯にある。江戸川区のハザードマップでは、台風などによる大雨が予想されるときは江戸川区以外の安全な場所（台地などの高台）に広域避難を呼びかけている。

1 来日インド人について

(1) どのような立場として来日するか

2000 年代中頃以前は IT 労働者としての来日が大部分であったが、2000 年代中頃以降は IT 製品の製作者としての来日も多くなった。しかし、日本の IT 企業から要請を受けたインドの企業が労働者や製作者を派遣する形で来日するインド人が多く、3 か月ほどの日本滞在がほとんどであった。2010 年代になってからインド人を直接雇用する日本の IT 企業が増えたため、滞在期間が延びている。

(2) 来日インド人住民と地元住民との間の問題

最大の問題はゴミ出しについてである。インド人住民はゴミを分別せずに出すため、地元住民との間でトラブルとなることが多い。これに対して、なぜゴミを分別しなければならないのか、出した後のゴミ処理の過程まで説明するとインド人住民は理解してくれるとのことである。しかし、ゴミの分別を理解してもすぐに帰国してしまい、その後に来日した別のインド人住民がまた分別せずにゴミ出しをするため、地元住民とのトラブルが絶えないそうである。また、インド人住民は夜 9 時頃に複数の家族で話しながら散歩することが地元住民とのトラブルとなっている。不動産業者によるアパートの部屋の貸し渋りもあるという。原因として、インド人住民が料理に使う香辛料の臭いが部屋にのこってしまうことがあるという。これらの問題について、よぎ氏はインド人と日本人の相互理解と、それに基づく歩み寄りが大切であると話していた。とくに互いの習慣を理解することは、言葉や食について理解するよりもはるかに容易であるとのことである。

2 カースト制度について

日本の学校教育では、カースト制度はヴァルナとジャーティからなり、そのうちのヴァルナは最上位にバラモン（司祭）が位置し、その下にクシャトリア（王侯・武士）、バイシャ（一般庶民）、シュードラ（隷属民）が位置していると教えている。しかし、よぎ氏の話では時代によってヴァルナの順位が変動するとのことである。また、異なるヴァルナへの異動もできたそうで、固定的な階級制度ではないようである。そのため、かつてはヴァルナの 4 グループはほぼ同じ地位だったが、植民地時代にイギリスによってそのバランスが崩されたとのことであった。インドでは現在でも恋愛結婚よりも親が相手を決めて結婚することが多いが、これもヴァルナの違いが影響している。ヴァルナが違うことで、食事の味付けや生活習慣などが異なるとのことである。

3 最後に

今回の講話を聴いて、異文化共生社会を実現するためには相互理解を目指すことが重要だと、改めて認識した。また、日本でのカースト制度に対する固定観念とは異なるカースト制度の実態を知ることができ、たいへん充実した研修となった。

（埼玉県立熊谷高等学校教諭 新井忍）



①はヒンドゥー教の代表的な神・ガネーシャ。現世利益をもたらす神とされ、商人から絶大な信仰を集める。仏教の歓喜天（聖天）。②はよぎ氏。スライドを交えてお話ししていただいた。質問も活発で大いに盛り上がった。③はインドのお菓子。米や豆などを原料にし、スパイスが効いているところがインドらしい。このほかに、冷たいレモネードも味わった。「味」から異文化を理解することも重要。

- よぎさんの話を本当に真剣なまなざしで聞いていた生徒たちの顔が忘れられません。（大宮東・小曾戸克巳・地理）
- いわゆるカースト制度の実情についても、仕事や生活習慣と結びついている点は、はじめてお聞きする内容で、参考になりました。（上尾鷹の台・武士田透・地理）
- よぎさんの話を聞くまで、日本で暮らす外国人のリアルな状況を知らなかったです。（熊谷西・小澤美羽・生徒）
- 東日本大震災の時、原発の放射能を恐れて帰国した人々も多い中で、よぎさんのように日本国籍を取り日本に生活基盤を持つ人がいたことを初めて知りました。（狭山緑陽・古川克・地理）
- 海外の方が日本の文化を知らないことによって、日本人にレッテルを貼られてしまうことの怖さを感じました。ゴミの分別など日本のルールは知らなければなりませんが、私たちがしっかりと伝える責任もあると思います。私たち日本人も見えて見ぬ振りをするのではなく、声かけをするなどして私たちの文化を伝え、理解してもらうことの必要性を感じました。（川越・森山裕太・地理）
- 日本人の勝手なイメージによって、外国から移住してきた方が住みづらくなっていることが印象に残りました。私たちが海外へ移住することになったとき、一人の行動によって悪いイメージが付かないようにしなければならないと教えられた気がしました。（南稜・嶋優衣・生徒）

- インド料理のスパイスの濃さが印象的でした。レモネードやお菓子里にスパイスが効いており、同じ『料理』でもこんなに違うんだな、と思いました。また、よぎさんが「このお菓子里は昔から食べている」と言っていたのを聞いて、こんなに味付けが濃くても慣れてしまうんだな、とも思いました。(熊谷・大澤憲悟・生徒)
- 文化、言語、食の違いなどにより、日本に定住せずに帰国を決める人が多いというお話が印象に残っています。よぎさんのお話を聞いて、「多文化共生」ということを実現するために、行政として、そして私たちができることは何かを深く考えさせられました。(南稜・岩崎比呂・生徒)
- インド人の生活習慣と現地日本人との摩擦について。保証人の有無が不動産の契約に影響を及ぼすことは想像がついたが、匂いも原因となるというのは、言われてみて初めてなるほどと思うことであった。(浦和・澤岡知広・地理)
- インドのヴァルナ、ジャーティについて。現在のカーストの様子。職業や結婚との関係について聞けてよかったです。特にジャーティのもつ意味。同じような慣習を共有していないと、結婚生活がうまくいきにくいという、そこには一つの合理性があることを知りました。(浦和商业・岡村豊・社会)
- 外国人の住宅事情や、夜の散歩の習慣など、教科書ではわからない実情を伺えてたいへん参考になった。インド人の方の就労形態のことも、日本社会の流れと違って両者の相互理解の難しさを感じました。カースト（ヴァルナ・ジャーティ）のことを、生活している様子で知ることができた。(小川・花輪恵・歴史)
- よぎさんの話にみられた日本における多文化共生の現状がとても印象的であった。外国人に対する日本の生活習慣等に関するガイダンスをどれだけ行ったとしても、われわれ日本の側も外国人に対応させる姿勢をもっと強くしなければ、今後の社会は安定しないのではないかと考えさせられた。(南稜・貴志弘基・地理)

■ 巡検を終えて…参加者が考える多文化共生社会

今回の巡検のまとめとして、参加者に宿題をお願いしました。

- (i) あなたが考える多文化共生社会とは何ですか。
- (ii) その実現のためにあなたができることは何ですか。

まずは生徒のみなさんの意見……

- (i) 多文化共生とは、異文化理解をした上で互いに譲り合って暮らす社会のことだと思いました。(ii) まずは相手のことをよく知り、受け入れる心を大切にしたいと思いました。また、多文化共生社会をあまり難しく考えず、相手と心地よく過ごせることも大切だと思いました。(熊谷西・小澤美羽・生徒)
- (i) お互いの文化を理解して協力し合うことだと思います。(ii) 自分の根本的な考え方(固定観念や自分中心のものの考え方)から見つめ直したいです。(南稜・中島鈴・生徒)
- (i) 多文化共生社会とはお互いが文化や習慣について理解をし、そのことで不利益を被る立場の人がいない社会のことだと思います。多文化共生社会が様々な国で実現されれば世界の諸問題についても団結して解決に向かう事ができると思います。(ii) 今回体験し学んだことを周りに広めることや、自分自身も新聞などで日本にいる外国人の実情についてさらに学ぶことが大事だと思います。(熊谷西・岩崎彩織・生徒)
- (i) 互いに認めあって譲り合うこと、また、コミュニケーションを出来るだけとり理解し合うことで生活しやすい環境を整えることだと思います。(ii) 些細なことでも普段から視野を広めると同時に、自分とは違う意見であっても「そういう考えもあるんだな」と受け入れていきたいと思います。(南稜・嶋優衣・生徒)
- (i) それぞれの人が持っている文化をみんなが認めてあげるような社会だと思います。例として、日本では犬は食べませんが、古くから韓国や中国、ベトナムなどでは食べる習慣があります。日本では犬を食べると聞いただけで嫌悪感を示す人もいます。このことから僕は、ほとんどの人は全ての文化を受け入れることはできないと考えます。実際、日常生活でもこの人とは合わないな、と思うことはあるはずです。だから、たとえ自分に合わないと思った文化に遭遇しても、「そういう文化を持っている人がいるんだ」と、理解した上で適切な距離を取ることが大切だと考えます。(ii) 具体的にはいろいろな国や文化を学び、新聞への寄稿などを通じて比較的弱い立場にある国や文化をいろいろな人達に発信していきたいと思います。(熊谷・大澤憲悟・生徒)
- (i) 外国の方は、ずっとこの日本に住んでいたという訳ではないから、日本の文化を『強制』してはならないと思います。外国の文化などをしっかりと理解し、柔軟に接することによって生まれる社会だと思います。(ii) 「理解する」あるいは「理解しようとする意思」が必要不可欠だと考えます。私は SNS を利用しています。その中で例えば、「在日韓国人は日本から出ていけ!」といった「外国人を排除せよ!」という書き込みを多く見かけます。しかし、これでは両国のためにならないですし、両国の亀裂が広まるとも言えます。そういったことをせずに、冠婚葬祭、病気、コミュニティ内の交流のサポートといったことを、行政だけでなく私達もしていく必要があると考えます。(南稜・岩崎比呂・生徒)

続いて、先生方はどのように考えているのでしょうか……

- (ii) 実際にヨギさんの話を聞いたことで、インド人のイメージが変わりました。定時制に勤務しているため、南アジアや東南アジア、南米出身の生徒が多数在籍しています。私自身も外国籍の生徒と関わる中で、その国のイメージが変わりました。お互いの文化を理解し合うためには、今回のような理解するための機会を作ることが重要だと思いました。日本にもたくさんの外国の方がいらっしゃるので、外国の方と交流を深める取り組みをしていけたらと思います。(川越工業定・新井晋太郎・歴史)
- (i) 多文化共生社会は異なる文化をいかにたくさん知ることができるか、同時に日本の文化を紹介することではないでしょうか。日本の文化も一つではないので私たちは日本をもっと知る必要もあると思いますが。(ii) 私は今定時制にいたることもありますが、外国籍の生徒が増加していることから、日本と母国の橋渡しができるような人材に育てていくことを心がけたい。(狭山緑陽・古川克・地理)
- (i) 私の考える多文化共生社会は、「思いやりの社会」です。(ii) それぞれの言語、文化、習慣について100%理解し合うことは難しいことだと思います。しかし、それらを知った上で、「この国ではそういう文化なんだ。だからこういう風に接すればベストなんだ。」と考えることはできると思います。今回の巡検は多文化を知る第一歩になったと感じています。知らなければ思いやることはできないと思うので、私自身も今後、より多くの文化に触れ(まずは世界の食文化に興味があるので、そこを入口にしたいです)、理解を深めていきたいと思っています。(川越・森山裕太・地理)
- (i) 来訪者と受け入れ側の双方が互いを「リスペクト」しながら生活できる社会。(ii) 教育に従事している者として、受け入れ側になり得る生徒に対して、来訪者をリスペクトするよう教育を施す。相手が観光旅行者であっても、定住者であっても、どこの国から来た人物であってもそうでなければいけないと思う。リスペクトというのは、相手に対して遠慮することではない。いけないことはいけないとはっきり伝えることもリスペクトに含まれる。そのようなコミュニケーションが取れるようにも教育していきたい。また、日本を訪れた外国人と話していてよく言われるのは「英語が話せないのは分かるが、なぜ日本人は、外国人に話しかけられると逃げるのか」ということである。外国人とコミュニケーションをとること自体を拒絶している日本人が多いことが窺われる。今後の教育を受けた若い世代から、こういった壁を壊せるような人間を育てていきたい。さらに、教員は市民として暮らす外国人とも触れ合う機会が多い。その際に、政治家や行政と市民との橋渡しをしやすいのではないかと思います。具体的には「市民がこのような形で困っているのを改善してほしい」ことについての情報をまとめて、しかるべき立場の人物に伝えることができる。これには教員だからこそ集められる情報が多分に含まれている。政治家や行政にとっても価値のある情報であろう。同様に、通学している外国人の生徒を通じてその保護者やコミュニティに対し、学校がする・できること／しない・できないこと、地域社会との関わり方や守らなければいけないルール、注意事項について周知することもできるのではないかと思います。(浦和・澤岡知広・地理)

- (i) これからの日本の労働力不足を支えるのは外国人であることから、外国人との共生は必至です。よって、外国の文化を尊重し、受け入れていくことは必須です。また、より長い目で見ると外国文化と日本文化の融合も見られるでしょう。それらも甘受し積極的に認め評価していくべきだと思います。(ii) たとえば身近では川口の中国人、蕨のクルド人のような人々・コミュニティと積極的に交流する、その文化に触れる、少なくとも忌み嫌うようなスタンスを取らずに受容していく態度を持ち続けること、また教師としてはそれを生徒に説き、ともに行動することが肝要だと思います。(浦和商業・岡村豊・社会)
- (i) 互いの文化・生活習慣について知ること。敵対するのではなく、適度な距離感をもって接すること。接点を軸に、互いに歩みよっていくこと。相互の良い点を認め、互いのコミュニティに参加することで、さらに理解を深め、持続的に関係を深め合っていくこと。(ii) まず、挨拶をする。知り合いになることから、関わりを持つことが大切だと考える。相互理解の機会をつくること。場の設定。学校やお祭りに参加するなど。身近に経験していることから、相手の文化への理解を深めていく。授業や総学、校外学習などで、外国の方々と生徒がかかわり、良好な関係を形成する機会を設ける。(小川・花輪恵・歴史)
- (i) 他者を受け入れること (ii) まず他者の話を聞く。そして、その価値観を理解し、否定せずに自分の価値観との妥協点を探すこと。これが民主主義の基本だと思います。(大宮工業・青柳紗香・歴史)
- (i) 互いの文化を理解して、それを蔑ろにせず、全ての人が「思いやり」を持って協力することのできる社会。(ii) 各地域の文化がどのようなものか丁寧に理解した上で紹介し、日本の習慣・文化が「当たり前」ではないことを伝えていくこと。その上で時間がかかってでも自分のやり方を押しつけない協力方法を模索する力を育てること。(南稜・貴志弘基・地理)

■ 来年に向けて・参加者の声から

巡検の感想のなかで、多くの参加者が実際に現地を訪ねることの重要性をあげていました。同時に、実施にあたっての課題等も寄せられました。この巡検をよりよいものにするために、参加者の声を記録しておくことにしました。

- 今後、生徒参加型の巡検を行う場合、生徒の帰宅時間があまり遅くならないように企画するとさらにベストだと思います。今回、解散時刻が大幅に遅れてしまいましたが、都内解散・女子生徒という点でも、心配した保護者もいたのではと思われます。(大宮東・小曽戸克巳・地理)
- 今回のコースを歩いて、多文化共生の観点からは新宿二丁目なども面白いのでは考えましたが、これは地理部会というよりも私たち社会部会のテーマかもしれません。また、見学箇所は減らして深くという見学方法もあるかなとも感じました。さらに昼食は各自でしたが、どこか多文化・異文化を感じさせる食事処を確保して、そこで参加者の交流をはかるというやり方もあるかなとも思いました。(川口東・大田史郎・社会)
- 地理部会による巡検であるが、多文化との共生という点で公民と、日本社会と外国人との関わりという点で世界史・日本史との関わりを強く持てた点がよかったと思う。巡検は地理だけの専売特許ではないと印象付けることができたのではないだろうか。今後の巡検において、歴史や公民を教えている先生方から「あれを見てみたい」というリクエストを受け付け、地理部会で巡検をアレンジしてみるのもよいかもしれない。「巡検に行きたい」という気持ちを持ってもらえる機会になると思う。(浦和・澤岡知広・地理)
- ふだん交流のない他校の生徒や教員と積極的にコミュニケーションを取っている様子が生徒に見られ、巡検の内容と合わせてそれらが生徒にとって大きな刺激となっていることがしっかり見られてとても感動した。(南稜・貴志弘基・地理)
- 驚きをもって感心したのが、巡検に参加した生徒の人数です。当日まではほんの数名だと思っていました。参加の理由や目的など、一人ひとりにいろいろインタビューしたいぐらいでした。でも当日は、自分がほとんど教員の立場を忘れていたので、自宅に着いてから後悔しました。いずれにしても、高校生が地理巡検に興味もってくれていることに感激しました。(飯能南・松本茂幸・地理)
- 今回の巡検で様々な地域や国の事情を歴史的・地理的視点から見ることができ、新しい考え方を得ることができました。(南稜・中島鈴・生徒)
- 今回の巡検で、私が今まで気にしていなかった日本の姿が見えたことはとてもよい勉強になりました。地理からの視点でも歴史からの視点でも、たくさんのことが学べました。(熊谷西・小澤美羽・生徒)

高社研地理部会主催地理夏季巡検 報告集

発行日：令和元年9月20日

発行者：埼玉県高等学校社会科教育研究会地理部会

ホームページ：<https://seifu.sakura.ne.jp/chiribukai/>



江戸川印度文化センターにて撮影。中央左がよぎ様。1階はレストラン「レカ」。よぎ様のお母様が経営し、インドの本物の家庭料理を味わえる。